

高等学校における教科指導の充実

外国語科（英語）

4技能の有機的な関連を図った指導の工夫

ー表現活動と動機付けー

栃木県総合教育センター

平成19年3月

## ま え が き

学力に関する国際的な調査や教育課程実施状況調査では、日本の高校生の学力の状況や学習に対する意識などが明らかにされ、国のレベルからも学力向上のための様々な提言がなされています。栃木県では、「とちぎ教育振興ビジョン（二期計画）」を策定し、中・長期的な展望に立った教育施策を、平成18年度より新たにスタートしました。ビジョンでは、「確かな学力」を育成することを教育施策推進上の重要な観点として掲げ、教材や指導の工夫をすること、思考力・判断力・表現力などを高める学び合いを充実することなどの指導のポイントを示しています。

各学校においても、教育活動の改善充実に日々努めているところですが、特に教科指導においては、限られた時間の中でも効果的な指導を展開して、生徒の学力向上に資することが大切です。

これらのことを踏まえ、総合教育センターでは、「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」に取り組んでおります。この調査研究の目的は、基礎・基本の確実な定着を図るための授業改善を目指して、教科指導の在り方について研究し、その成果を普及することにより、学力の向上に資することにあります。今年度は、国語科、数学科、理科（物理、化学、生物）、外国語科（英語）の4教科において、教育課程実施状況調査等の調査結果から指摘されている課題を踏まえ、その解決を図るための授業改善の方策等について研究に取り組みました。研究の成果をまとめた本冊子を、各学校の実情に応じて有効にご活用いただければ幸いです。

最後に、今年度の調査研究を進めるにあたり、ご協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成19年3月

栃木県総合教育センター所長

五味田 謙一

# 目 次

はじめに	1
事例1 英語 I (第2学年)	2
事例2 英語 I (第1学年)	13
事例3 Oral Communication I (第1学年)	29
おわりに	44

## 4 技能の有機的な関連を図った指導の工夫

### ー表現活動と動機付けー

#### はじめに

英語科では、学習指導要領の趣旨に則り、平成14年度高等学校教育課程実施状況調査等の結果から指摘されている課題を踏まえ、研究テーマを「4技能の有機的な関連を図った指導の工夫～表現活動と動機付け～」として研究を行った。

「平成14年度高等学校教育課程実施状況調査報告書」では、生徒と教師の意識について次のように述べている。

「自分の言いたいことを英語で言えるようになる学習」と「自分の言いたいことを英語で書けるようになる学習」は、ともに過半数の生徒が「よく分からなかった」と答えている。また、「生徒にとって理解しにくい」と答えている教師の割合も高い。このことから、生徒も教師も英語で表現する学習については難しいという認識をもっていると考えられる。

生徒の回答は、「自分の言いたいことを英語で言えるように、また英語で書けるようになりたい」という気持ちの裏返しであると考えられる。一方教師は、その生徒の気持ちに、十分に応えきれず指導に困難をきたし、悩みをもっていると言える。

さらに、「表現の能力」指導上の改善として次のように述べている。

- ・生徒が興味や関心をもてるトピックを選択し、まず「話すこと」と「書くこと」の活動を組み合わせることが重要である。
- ・「話すこと」と「書くこと」の活動を組み合わせることにより、話したり、書いたりする機会を十分に与え、話す力と同時に書く力を向上させることが大切である。
- ・まとまりのある文章が書けるようにさせるために、単なる文の羅列ではなく、段落の基本構成を考えて書かせるなどの指導を充実させることが重要である。

今回の研究では、上記の指摘を参考にしつつ、研究協力委員の学校の実態に応じて指導を工夫し実践することとした。**事例1**では、音読を通して英語を使っているという実感を生徒にもたせる指導の工夫と、生徒への動機付けとして音読テストを行った。**事例2**では、導入時に、「聞くこと」、「話すこと」の活動を行い、それと本文を「読むこと」を有機的に関連付けて指導し、教科書本文の学習後に、「まとまりのある文を書くこと」を行わせる活動を工夫した。**事例3**では、時事的な話題に関して、ALTの主張を聞き、その後、自分の意見をALTに伝える活動を工夫した。

各事例においては次の点に留意した。

- ①英語を知識として蓄えることはもとより、「使ってみる」ことを重視すること。
- ②英語を「使ってみる」ことで生徒に達成感をもたせ、英語学習への動機付けを図ること。
- ③易から難へと段階を踏んで指導していくこと。

#### <研究協力委員>

栃木県立栃木農業高等学校	教諭 白 井 淳 子
栃木県立大田原高等学校	教諭 鈴 木 長 生
栃木県立高根沢高等学校	教諭 河 上 恵 太

#### <研究委員>

栃木県総合教育センター研修部 副主幹 佐 野 宏 夫